

■アメリカのジャポニスム—ルックウッド製陶所をめぐる

森 仁史

はじめに

明治日本の陶磁器産業が欧米のジャポニスムによって興隆に向かい、新たな進路を歩んだことは知られるとおりである。しかし、ジャポニスムと言ってもその現象内容はどこでも一様ではなかった。例えば、フランスではマネやゴッホは自分の作品に直裁に浮世絵を登場させているが、イギリスではホイッスラーは画面や画題全体に浮世絵を借用している。つまり、日本のとくに何に関心を抱いたか、どんな方法で日本趣味を表現しようとしたか、地域によって大いに異なっているのだ。

ここでは、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）における日本趣味がヨーロッパと異なっている側面に注目しつつ、その全体的傾向を吟味し、これを背景として創業したルックウッド製陶所 Rookwood Pottery の活動を検討してみたい。

1. アメリカの日本

アメリカが日本の隣国であると言うと奇妙に感じられるかもしれない。しかし、日本からならインドやアラビアを経由せずにはヨーロッパに到達しないのと異なり、アメリカは太平洋を越えさえすればたどり着くことができる。ましてや、19世紀後半はアメリカは捕鯨のために西海岸から北太平洋に進出しようとしていた時期であった。まさに1854年のペリー来航はこうしたアメリカ側の理由に基づく必然だったのである。そうであるからこそ、1841年の中浜万次郎ら漂流民の救助渡米がありえたのだ。おりしも幕府の開国に伴って、新見豊前守遣米施設一行

が1860年にはアメリカ各地を巡歴し、ニューヨークでは大歓迎をうけた。

もちろんアメリカが移民の国ではあっても、ヨーロッパにとってと同様、日本は全く未知の国であり珍奇な民族であったことには違いなかった。なので、初めにアメリカが紹介した日本はこの新奇な国への興味を満たす芸人だったとしてもやむをえなかつただろう。1866年にはR. L. カーライルが浜碇梅吉ら18名の日本人軽業師の一座を組織し全米を巡業したし、この翌年には「ミカド曲芸団」がサンフランシスコで公演したことが記録されている。1867年勝麟太郎の息子小勝がコロラド号で渡米したときには、大阪の独楽廻し早竹虎吉一座も乗り合わせていた。あるいは、1884年に横浜に支店を開設した骨董商ディーキン兄弟商会 Deakin Brothers & Co. (サンフランシスコに本店) が日本人村 Japanese Village と名づけた職人の一団を組織し、全米各地（ミルウォーキー、シカゴ、オマハ、セントルイス、シンシナティ、ニューヨーク、ボストン）を巡回させた。(図1) このときには、アメリカは新たな興味の対象として日本を付け加えたに過ぎなかった。ただ、こうした交流摂取に受け入れる側のアメリカ人が直接日



図1 日本人村一行
Explanation of the Japanese Village And Its Inhabitants, N. Y., [1886]より

本人と関わっていることはヨーロッパとの交流と様相が異なる点である。

1876年 G. T. マーシュ Marsh はサンフランシスコのパレスホテルに東洋美術商を開店した。もちろんそこで日本美術も扱われた。彼は1881年にシンシナティにも支店を開いた。1860年代末から70年代の初めにはアメリカにもヨーロッパからジャポニスムが伝わっていたので、彼らはさらに日本の文化に注目するようになっていた。1886年に E. S. モースは「この20年間、次第にわれわれの国に、珍しく、美しく、そして人目をひく、いろいろな日本のものが姿を見せ始めた。」と記している。

このようにもたらされた日本産品がアメリカに新たな創造の種子となっていく。1876年のフィラデルフィア万国博覧会（以下、万博）の製造品部門への日本出品1067点の大半は工芸品であり（図2）、まとまってアメリカ人の眼に触れた最初の機会となり、これがきっかけとなってアメリカの日本熱を大いにおおったことは間違いない。日本政府はウィーン万博での成功を踏まえて、陶磁器、金工、七宝、漆工、木工など伝統技法による製品制作の積極的指導にのりだし、産地はこれに応じて傑出した技量を遺憾なく発揮した出品が達成された。これらは後に山高信離によって『温知図録』と名づけて集成され、当時の明治政府有司がどれほど意気込んで制作に携わっていたかを今に伝えている。これらと同様の技法は中国にも存在したのだが、中国の官窯などは政治的混乱のなかで衰退していたことが新興国日本には幸いした。明治政府の意図どおり、日本出品は155点が褒章を授与され、日本の産地は工芸品輸出に自信を深めた。会場ではとりわけ陶磁器、金工品が圧倒的な存在を示し、多くの来場者の眼を引いた。のちにルックウッド製陶所を創始する M. L. ニコルズや



図2 フィラデルフィア万博日本出品

Japan Gose to the World Fairs. Japanese Art at the Great Expositions in Europe and the United States 1867-1904, LACMA, 2005より

ティファニー社のデザイナーとなる L. C. ティファニーもその一人であった。1870～80年代にティファニー社は次々に陶磁器や銀器で日本風の作品を世に送り、1878年パリ万博にジャパネスクと称する銀製品を出品し高い評価を得た。

アメリカでの日本趣味は東海岸（ボストン）、西海岸（サンフランシスコ）が中心であったが、前者がヨーロッパの刺激から海外への関心を広げたのだとすれば、後者は移民やアジアを相手とする貿易商など直接的な日本との関わりに発することが多いようだ。だから、絵画よりは工芸品や建築、庭園など具体的な日本文化への関心が強く、広く受け入れられた。前述のマーシュはオーストラリアに生まれ、少年時代1872年から3年半を自ら望んで日本で過ごした体験をもっていたが、1894年カリフォルニア冬期万博（サンフランシスコ、ゴールドゲート公園で開催）にジャパニーズ・ティー・ガーデンと称して、1200坪の敷地に入母屋式日本家屋、二層鐘楼門などを建て、たいへんな成功を収めた。この先例をみてか、1896年興行師櫛引弓人はアトランティックシティーに東照宮陽明門、亀戸天神太鼓橋、銀閣寺の模造建築を建て、お茶を提

供し、これも人気を博した。櫛引はその後1909年日英博覧会でもフェア・ジャパンと名づけた興行を請け負っている。

その後マーシュは西海岸各地にこうしたティー・ガーデンを経営し、なかでも1903年にパサディナに開設した庭園は規模が大きく、1913年H. E. ハンティントンによって購入移築され、ロサンジェルス北方のサンマリノに現存している。

(図3) また、ゴールデンゲート公園の日本庭も残され、1915年のパナマ太平洋博覧会の日本館の一部(五重塔、南門ほか)がさらにその後移築されている。この1915年には東海岸のブルックリン植物園でも寄付金によって日本庭園がつくられ、渡米していた塩田武雄が設計した。この頃、西海岸にはそりのある屋根や鐘楼風な塔屋など日本の伝統建築のポキヤブラリーを採用したバンガロー式木造住宅が数多く建てられたが、これを設計したのはグリーン&グリーン建築事務所で、彼らの建築はF. L. ライトのプレーリー・スタイルに影響を与えたとされている。



図3 ハンティントン図書館庭園

これより少し遅れて20世紀に入ってから、ジャポニスム文学と呼ばれる作品がアメリカで人気を得る。O. ワタンナ Watanna (W. E. B. バブコック・リーヴ) はその代表的作家で、彼女はイギリス人と中国人の子としてモントリオールに

生まれた。1901年に発表した『日本の鶯』A Japanese Nightingale が10万部を売りつくし、この作品では片岡源次郎(江頭源次郎)が挿絵を担当した。片岡は有田出身で1889年に渡米し、1895年にアート・スチューデント・リーグに入学し挿絵、舞台衣装などで評価を得ていた。1904年に発表した『アゼリアの恋』The Love of Azalea では滞米中であった藤雅三(1883年工部美術学校修了)に挿絵を依頼している。1904年にT. P. ウィリントン Williston が『日本お伽噺』Japanese Fairy Tales を出版したが、滞米中であった小川三知に挿絵を依頼した。(図4) 小川は1904年に白山谷を紹介され、彼の指示でアーティスト・グラス・ペインティング社に赴きシンシナティで初めてステンドグラス制作の修行を積んだ。あるいは、1906年にフェノロサ夫人 M. フェノロサが発表した『竜の画家』The Dragon Painter (図5) もまたこうした一群のなかに数えることができるだろう。この作品の主人公はカノウ・インドラであり、彼が竜の画家と呼ばれる野生の作家を見出し、都に誘って援助するいきさつが主題なのだが、これはあたかもフェノロサと狩野芳崖との関係を思い起こさせる。この作品は1915年に早川雪洲主演で映画化もされており、アメリカでこうしたストーリーが一定の観客動員をもたらしていたことは興味深い。同様に1903年イギリスとアメリカで同時刊行された岡倉覚三の『東洋の理想』The Ideals of the East もこれらの日本趣味の一環と理解すべきなのだろう。先述のマーシュも1916年に『夜明けの大名』The Lords of Dawn を発表している。美術では世紀末には低調となった日本趣味は文学では20世紀にはいっても関心が衰えていなかったことになる。

このように、アメリカのジャポニスムはひとつは具体的な造形物としての工芸に関心が向か

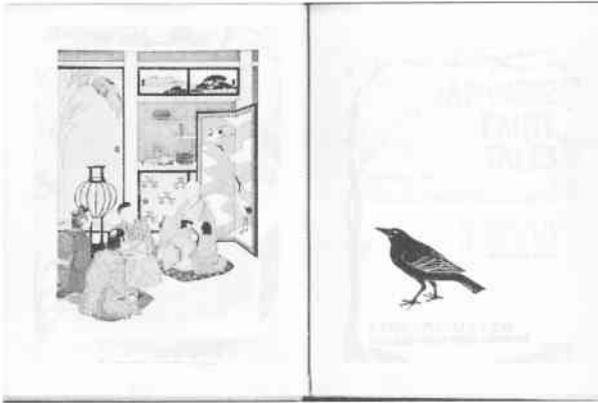


図4 『日本お伽噺』扉



図5 『龍の画家』表紙

っていたことが挙げられ、その後に庭園や家屋、文学などの日本愛好が続いていた。庭園、建築の制作に関して、往々にして日本体験のある外国人や場合によっては渡米した日本人が関わることが多いのが目に付く。この意味では日米は隣人同士らしい関係を結んでいたと言えるだろう。また、これらの普及がかなり広い受容層に拡散していたことも指摘しておかなければならない。つまり、関心の向かう分野や関心の広まりと言う側面でアメリカのジャポニスムはヨーロッパと異なった特性を備えていたのである。

2. シンシナティの日本マニア

アメリカ東海岸から西部への中継地という位置を生かした商業都市としてシンシナティは19世紀にはクィーン・シティと呼ばれて繁栄していた。この地の上流階層にも他の地域に劣らずジャポニスムが伝播した。

なかでも先述のニコルズは友人がロンドンで入手した北斎漫画などの日本版本を1875年には入手していたようだ。1876年のフィラデルフィア万博から帰ったニコルズは父親 J. ロングワースに材料と職人を日本から入手して製陶所を開設する考えを伝えたが、実現には至らなかった。直接日本人を雇い入れて日本風な制作を着想することはこの国のジャポニザンがヨーロッパと異なっている点であるように思える。

2年後、1878年に夫 G. W. ニコルズが『陶器製作法』Pottery How It is made (図6) を出版したとき、夫人は日本の版画を引用して表紙、挿絵を描いた。ニコルズの著作はアメリカで最初に日本陶磁器をすぐれた作品と評価した書物であった。この年5月にはシンシナティで433点の日本美術品の売り立てが開かれ、同月女性美

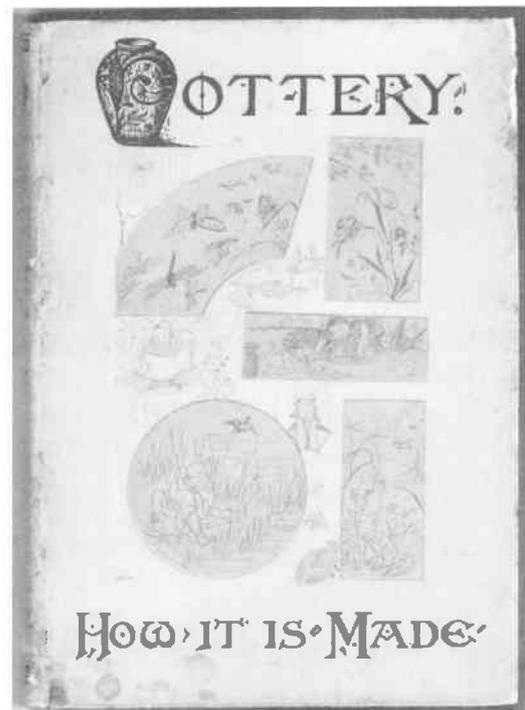


図6 G. W. ニコルズ『陶器 その制作法』表紙

術館協会が借用品を集めて日本美術品展を開催している。更に2年後の1880年には309点の日本美術品売り立てが行われ、この地域にかなりの日本美術品コレクターが存在していたことが分かる。マーシュの支店開設もこうした動向を受けてのことに違いない。もう少し後になるが、1898年には杉本松之助が美術品を含む日本産品を扱うニッポン The Nippon (図7) を開店しており、世紀末まで日本熱が冷めていなかったことを物語っている。この杉本の元に嫁いだのが長岡出身の鉞子であり、後の『武士の娘』A Daughter of the Samura (1933年) の著者である。(図8)



図7 The Nippon (シンシナティ市立図書館蔵)



図8 杉本花野誕生祝賀パーティ (中央花野を抱く杉本、その左テイラー) 1899年

ニコルズは1880年ようやく念願かなって市内の学校跡地に製陶所を設立することができた。最初に雇い入れた画工は A. R. ヴァレンチエン Valentien で (図9)、彼はこれ以前にパトリック・L. コルトリイ窯で釉下彩を教えていた。ま

た、同じ年 L. ハーン の 絵 画 仲 間 で あ っ た H. フ ァ ー ニ イ Farney も 雇 わ れ て い る。翌 年 に は 日 本 人 画 工 イ チ ズ カ ・ ケ ン ズ Ichidsuka Kenzo、1885年には拝郷益夫を雇い入れており、ニコルズが最初に抱いたアイデアを実行していったと思われる。1889年の清風與平の証言には、「同社 (ルックウッド) の社長は一夫人にして非常の日本好なりしが先年日本に遊びし時余の店舗に来りて日本磁器の精緻なるに驚嘆し帰国の後之を試みしも遂に磁器を製すると能はず再び日本に来りて全国の陶磁器生産地を巡遊し遂に出雲焼の陶器を製造せんことを思ひ立ち二名の本邦職工を雇入れて帰国し前記ロツクウッド製陶会社を起こせしなり爾来毎三年に日本に来たり」と述べ、ニコルズが何度も来日したとしている。



図9 ヴァレンチエン《花瓶》1885年

1886年はシンシナティの日本熱が頂点に達した年となった。3月に E. S. モースが市内で4回の講演を行ったが、これはシンシナティ美術館開館記念としてニコルズが招いたようだ。夫と死別していたニコルズはこの月に B. ストーラーと結婚し、モースから陶器コレクションを3,500

ドルで購入し、2年後シンシナティ美術館へ寄託している。モースはセーラムに戻ってから更に約150点の土瓶コレクションの販売を美術館に提案しているが、実現には至らなかったようだ。そして、9月19日から開かれた第13回シンシナティ産業博覧会（図10）に日本人村が巡回してきた。シンシナティでは村は20に分けられ、家具・絹紡ぎ・絹織・掛物絵師・床屋・しんこ細工・道具屋・弓・刺繍・備前焼絵付け・仕立て屋・七宝・茶屋・早描・金工・太田焼（ろくろ）・絵巻絵師・薩摩焼・木彫から成っていた。このとき日本人村は70名程度で、このなかに子どももいた。

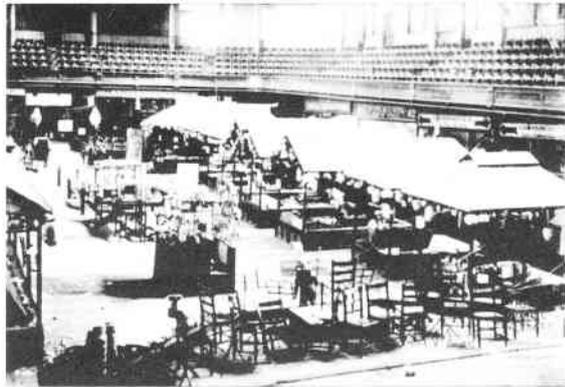


図10 第13回シンシナティ産業博覧会会場
（シンシナティ市立図書館蔵）

10年後の1896年にも、シンシナティ美術館で735点の絵画、彩色木版画からなる W.H. ケチャム・コレクション展が開かれ、このときは会場でE. フェノロサの講演会が開かれた。1870年代から世紀末にかけて、まさにシンシナティはボストンに並ぶジャポニスムのメッカと言ってよかった。

白山谷喜太郎は1886年の11月10日に横浜からサンフランシスコに向け日本を出国しており、このとき33歳1月と記録されている。白山谷は翌年5月3日ボストンからシンシナティに到着しているので、シンシナティ巡回中にはルックウッド製陶所に雇われていなかったようだ。白山

谷が入社した頃、画工たちのデザイン手法にもたらされもっとも大きな変化は写生を主要なデザインソースとすることであった。このため工場敷地内に庭園をつくり、四季の草花を栽培し、さかんにそれらの写生を行った。

1889年パリ万博でルックウッド製陶所は初めて金賞を獲得しヨーロッパでその存在を知られるようになる。しかし、ストーラーによる個人経営では企業として軌道に乗せることは難しく、1891年 W.W. テイラー Taylor が経営者として招かれ、製品形状記録 Shape Record Book がつくられ、製品の体系化、製品戦略の見直しが進められ、ストーラーは実質的に経営から外れることになった。その後1894年に、ストーラーの金工品制作（図11）への意欲もあって製陶所に金工部が設けられ、ここに白山谷が連れ帰った浅野与三吉が雇い入れられた。浅野は明治9（1876）年金沢で創設された銅器会社の職工の一人であり、かなり腕のいい金工職人であった。ここでブロンズ製品が制作されたが、販売不振のため1897年に廃止された。ストーラー夫妻はこの年外交官としてブラッセルに赴任することになり、夫人は浅野を同伴した。



図11 ストーラー《台付カップ》1898年

ルックウッドは1900年パリ万博でグランプリを獲得し、美術陶器メーカーとしての名声を確立する。(図12) これは同社の初期の製品が日本的モチーフの珍奇さを強調するグロテスクな造形から、器形に合わせてモチーフを釉下彩をつかって優美に表現する路線に転換し、これが成功した成果とすべきだろう。この転換に先述のルックウッド画工たちのデザイン手法の変化が大いに寄与していることは疑いない。ここには、白山谷が日本的モチーフを表現するに際して伝統技法の描写に拘泥することなく、西洋的な構成法に躊躇なく溶け込んでいけたことがよい影響を及ぼしていよう。これは例えば、伝統的な日本が描法を陶磁器に移植しようとした瓢池園の作品(図13)と比較すれば、伝来の日本画を器物のうえに移すことに拘泥するあまり器物の造形がかえって絵柄を阻害しかねないことになっていることとは対照的である。つまり、日本趣味を越えて日本的味わいを製品のうえにどのように表現するかが課題なのだった。日本人が無自覚だった領域でルックウッドが先駆けた部分がここにあり、20世紀初頭の海外市場における彼我の評価の差となって表れたのだ。このてんでルックウッドは日本にとってさらに学ぶべき対象であったことが理解できよう。

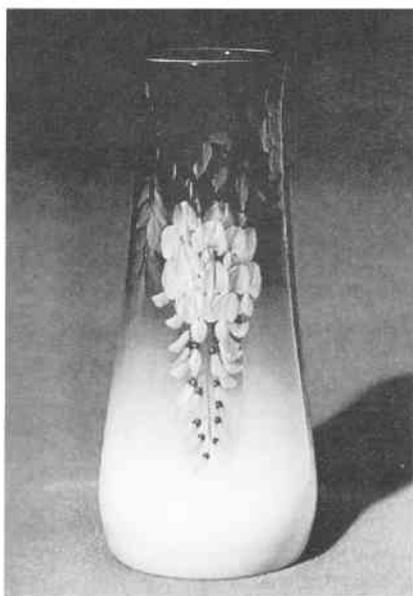


図12 シュミット《花瓶》1907年



図13 瓢池園《青磁上絵付金彩窓絵》

むすびにかえて

アメリカにおける日本趣味は往々にして日本との直接的交流の産物であった。ルックウッドはまさにその典型であり、そうなることで美術陶器の世界に確固たる地位を築いていった。白山谷以外の画工たちもいかにも優美な日本的モチーフを自らのものとして作品にしている。大洋を超えて日米の美意識が交わることで、豊かな結実がもたらされたと言えよう。この事実はアメリカが多くの民族から構成され、多様な文化の共存を許容していたという客体的な事情以上に、異質な文化の遭遇がもたらす新たな美の展開への積極的な可能性を示しているという点で今なお学ぶべきなものかを秘めているように思えてならない。

(金沢美術工芸大学教授)

参考文献

- Japan Directory, Yokohama, 1884-1889
 Explanation of the Japanese Village And Its Inhabitants, [Cincinnati], nd.
 Explanation of the Japanese Village And Its Inhabitants, N.Y., [1886].
 「米国書信」『読売新聞』明治19年4月9日

- 「第八次講談会」『大日本窯業協会雑誌』第2集、明治27年
- 「陶山及清風両君の陶磁器談」『大日本窯業協会雑誌』第83号、明治32年7月
- 飛鳥井孝太郎「ロクウッド実見談」『大日本窯業協会雑誌』第85号、明治32年9月
- 西浦猪三郎「対米陶磁器貿易」『商工局臨時報告』第3冊、明治38年3月
- 「ロツクード氏新式製の陶磁器」『読売新聞』明治38年3月2日
- 古田土貞治「米國ニ於ケル美術工芸品ノ趨勢」『商工彙報』明治41年7月
- 「米國に於ける陶磁器の意匠図案に就て」『商工彙報』明治43年4月
- 小川三知談「米國に於けるステインドグラス」『美術新報』第11巻第4号、明治45年2月
- 白山谷喜太郎「日本趣味の陶器製造を以て著名なる米國ロツクウッド製陶所の現況」『第6回商品改良会報告』大正2年
- # 「家庭婦人としての焼物」『現代の図案工芸』第74号、大正9年7月
- # 「米國ロツクウッドの日本趣味製陶」『現代の図案工芸』第87号、大正10年8月
- *
- Peck, H. *The Book of Rookwood Pottery*, Tuson, 1986
- Ellis, A. J. *Rookwood Pottery. The Glaze Lines*, Atglen, 1995
- 児玉実英『アメリカのジャポニズム』中央公論社、1995年
- 『金沢の近代工芸史研究』金沢美術工芸大学、1995年
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』彩流社、2005年
- 柳田由紀子『太平洋を渡った日本建築』NTT出版、2006年
- *
- Trapp, K. *Rookwood and the Japanese Mania in Cincinnati*, *The Cincinnati Historical Society Bulletin* Vol. 39 No. 1, Spring 1981.
- マーチン・アイデルバーク「20世紀への転換期におけるジャポニズムとアメリカの陶磁器」、『アメリカのジャポニズム展』世田谷美術館、1990年
- Howe, J. *Breaking the Mold: The Metalwork of Maria Longworth Storer*, *Studies in the Decorative Arts*, Vol. 8 No. 1, Fall-Winter 2000-2001.
- 高木典利「近代陶磁を彩った人々—アメリカの美術陶器、ロツクウッド—白山谷喜太郎」『近代陶磁』6号、2005年5月
- 瀧井直子「藤雅三の仕事—アメリカでの活動を中心に」『近代画説』14号、2005年
- 青柳保子「再発掘『武士の娘』—長岡とシンシナティに残る記録より—」『長岡郷土史』44、2007年5月
- 拙稿「日本とアメリカ—対岸の合わせ鏡として」、『アメリカの見た夢 1920-30年代の絵画、写真、デザインと日本』展図録 島根県立石見美術館、2009年
- 五味良子「ロツクウッド・ポタリーのジャポニスム—エキゾティスムから造形原理へ—」（東京藝術大学修士論文）2010年